

< 研究発表 1 >

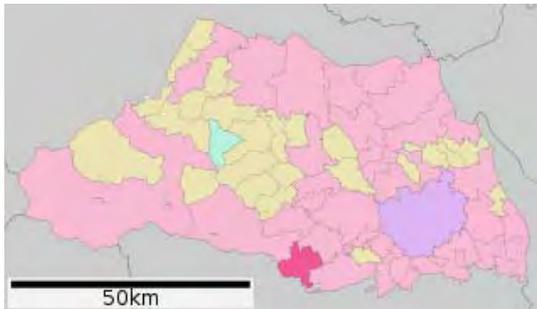
日本の伝統・文化（お茶）と触れ合う修学旅行

入間市立金子中学校

教諭 井上 悦弘

I. はじめに

入間市は、埼玉県南西部にある人口約15万人の市である。市の南部には、狭山丘陵の豊かな自然が広がり「狭山茶」の主産地として有名である。それにより農業都市というイメージで強く見られることも多いが、武蔵工業団地や狭山台工業団地など、市制施行以来工場誘致を積極的に行い、県内有数の工業都市となっている一面も持っている。また、市の南側は東京都と境を接し、大型の商業施設のオープンに伴い、各家庭の生活圏も幅広くなりつつある。



金子中学校は、市内で2番目に古い伝統校である。開校以来65年を経過するとともに、市制施行以前からの「教育村金子」の伝統を有した、地域に根ざした学校でもある。先に述べたように、入間市の中でも狭山茶生産の中心地であり、茶畑と加治丘陵に挟まれた校区はとて広く、製茶業に携わる家庭の生徒も多い。保護者や地域は、学校に対する関心・協力が高く、PTA・教育後援会をはじめ、青少年健全育成会、区長会、APOC(地域防犯ネットワーク)、民生児童委員協議会等より様々な支援を得ている。

しかし、時代の変化に伴い、保護者の価値観や家庭教育の姿勢は多様化しつつあるのが現状でもある。本年度は、学級数9学級、生徒数284名、家庭数260世帯となっており、市の中では小規模校に属する。学校教育目標は『さわやかな中学生・自ら学ぶ生徒・心の豊かな生徒・体力のある生徒』であり、その実現に向け日々の教育活動に邁進している最中である。生徒は全体的には穏やかでまじめな生徒が多く、一小学校からの持ち上がりで入学してくるため、よく言えば人間関係が濃密であり、相互理解が深まっていると言える。しかしながら、人間関係に新たな展開が見られず、閉鎖的な側面も持っている。尚、23・24年度は、北校舎改築工事の為、全校生徒は仮設校舎で授業を受けている状況である。



また、入間市内の小中学校では、「狭山茶とふれあう教育」を推進しており、小学生の茶摘み体験・手揉み茶体験や中学生の茶席体験を各校で行っている。そして、お茶とふれあう体験を通して、郷土に栄えるお茶文化への理解を深めている。本校でも、平成25年度に完成する新校舎内に茶室がつくられることになっており、来年度の1年生から総合的な学習の時間で茶道(盆点前)を学ぶ計画となっている。また、校舎内には、各階の水道脇にお茶を飲むことができる「TEA CORNER」が設置されており、生徒たちは休み時間等にお茶を飲み、休息をとる姿が見られる。そのような環境の中で、学年ごとに実施されている「お茶に関する体験」を身近な形で3年生での修学旅行に結びつけていくことはできないかと考え、本発表に至っている。

II. 1年時でのお茶と触れ合う行事への取り組み

入間市博物館（アリット）での茶席体験 平成22年10月22日（金）実施



ねらい ①博物館の見学、茶席体験を通して、郷土の産業や歴史に触れ、郷土への関心を広げる。

②クラス別行動、班行動を通して、まとまって協力する力を育てる。

③集団行動のルールや公衆道徳を学ぶ機会とする。また、博物館見学の決まり、マナーを知り、それを実行する。（修学旅行を見据えて）

体験内容 ①抹茶体験 ② 常設展見学 ③ ビデオ視聴（Q&Aお茶百科・日本のお茶）

※その他、おいしいお茶の入れ方講座を3クラスで時間を区切って体験した。

本校から、バスで10分ほど離れた場所にある入間市博物館で、クラスごとに茶席体験を行った。1学期には、入間市青少年活動センターまで、校外学習として班単位のウォークラリーを実施したが、交通機関(バス)を使っでの移動は中学校生活で初めてとなり、

修学旅行に向けての練習として捉えることができた。また、博物館内の常設展見学(郷土の歴史・文化)を巡る調べ学習においても、班単位での行動となり、修学旅行での班別行動に向けての練習となった。

Ⅲ. 2年時でのお茶と触れ合う行事への取り組み

① 手もみ茶体験 平成23年12月 2日(金)実施

入間市手もみ狭山茶保存会と金子地区青少年健全育成推進会のご協力により、本校第2学年の生徒全員を対象に手もみ茶の見学、体験を実施した。



ねらい 地域の伝統を知り、地域の伝統・文化を継承し、実践する。

体験内容 手もみ茶の体験

当日は、入間市手もみ狭山茶保存会の方々のご協力により、各クラス約1時間程度の体験となった。地域のメディアはもちろん、NHKのカメラ・取材も入るなど体験の様子は学校内外で紹介されることになった。

生徒の感想

- ・あたたかい台の上で、教えてくださった方の手に吸い付くように茶葉が転がっていたように見えたのが不思議で印象的でした。
- ・私は、今回初めてお茶づくりを体験しました。小学生の頃「お茶を作る工場」を見学したことはありましたが、それを手作業でやるというのは本当に大変なことだとわかりました。「伝統の技」というのは本当にすごいと思います。このようなおいしいお茶をつくる伝統がいつまでも残るといいなと思います。
- ・体験する前は簡単そうに見えて、ただ、お茶をまぜるだけかと思っていたけれど、実際はいろいろ順番があり、やり方も難しくて私にはすぐにできませんでした。新たにお茶についてわかったこともあったので良かったと思いました。

② 煎茶体験 平成24年 3月 2日(金)実施



ねらい 自分達がつくった手もみ茶の茶席体験を通して、茶の文化を知り、自ら学び行動する態度を育てる。

体験内容 煎茶体験

当日は、本校の元PTA会長でもあり、地元の博物館(アリット)でお茶に関する数多くの講座を担当しておられる双木茂芳先生を講師に迎え、2年生全員を対象に煎茶体験を実施することができた。このときは、仮設校舎のため大会議室に畳を敷いての体験となったが、来年度からは新設の茶室での実施となる。

生徒の感想

- ・今日の体験で、お茶を入れるにはちゃんと手順があることを知りました。また、ちょうどよい温度やお茶の入れ方などがわかって良かったと思います。初めに飲んだお茶は苦くてびっくりしましたが、2回目に飲んだお茶はちょうど良かったのでおいしく飲めました。これからお茶を入れて飲むときは、今回学んだことを生かしておいしいお茶になるようにしたいと思います。
- ・以前、煎茶にも茶席の決まりがあるというのは聞いたことがありました。でも、実際に体験するのは初めてで1年生の時の抹茶体験とは違うんだなと思いました。お茶をふるまってくれる人との距離が近く、抹茶ほど固い感じはしないように思いました。丁寧にお客さんのために入れたお茶はとってもおいしかったです。いつか私もあんなおいしいお茶を入れたいです。
- ・興味があったお茶の作法を教えてくださいました。抹茶に比べ、煎茶の歴史は浅いそうですが、日本人らしい心遣いの作法があつて素敵だと思いました。

IV. 修学旅行への準備

① オリジナルガイドブックづくり(2年時)

修学旅行の事前学習として、金子中オリジナルの「京都・奈良ガイドブック」を2年生の3学期に作成した。目的としては、①「修学旅行」への意欲を高めるため ②「京都・奈良」についての知識を得るため ③「京都・奈良」での班別自主行動の計画づく

りのため ④「調べ学習」「資料のまとめ方」「発表」がさらに上手になるため等である。具体的には、事前に指定された「京都の名所」「京都の文化」「奈良の名所」「奈良の文化」の中から一人で「1つ」を担当し、さらに班全員で協力して作成するものも含まれ、クラスごとに1冊の冊子をつくりあげた。調べる手だてとしては、各クラスに配られる「修学旅行関係の本・雑誌」「学校のパソコン」「各家庭にある資料」「家の方や先輩、先生方からの情報」をもとにB4サイズの新聞形式でまとめを行った。生徒たちは、この自作のガイドブックをもとに、2年時中に各自の「修学旅行2日目おすすめ行動プラン」を作成。新年度4月後半に新クラスでの修学旅行班が編成されたのち、それぞれのクラスで作成されていた班員のプランを自分のプランと比較検討しながら、「京都市内班別タクシー行動」の計画を完成させていくために活用された。



〈クラスごとに作成されたガイドブック〉〈ガイドブック内の宇治抹茶についてのページ〉

V. 平成24年度 修学旅行実施計画 (概略)

1. ねらい

金子中学校 学校教育目標 さわやかな中学生より

- ・自ら学ぶ生徒 日本の伝統文化や歴史を学び、見聞を広め、今後の生活に役立てる
- ・心の豊かな生徒 計画・準備において自分の役割を果たし、協力することの大切さを学び、集団生活における人間関係の絆を深める
- ・体力のある生徒 班別行動やクラス別行動の計画や実践を通して、自主性や責任感を身につけさせる

2. 修学旅行概要

- ・期 日 平成24年5月15日(火)～5月17日(木)
- ・場 所 京都・奈良方面
 - 1日目 法隆寺・奈良公園内見学
 - 2日目 座禅体験・京都市内班別タクシー行動
(この日にお茶と触れ合う体験を実施)
 - 3日目 クラス別バス行動
(嵯峨野方面・二条城方面・伏見稻荷方面)

- ・参加生徒数 男子44名 女子 51人 計 95名
当日は、欠席者なし。全員参加で実施した。

- ・費用 約53,000円

3. 修学旅行実施委員会

2年時の3学期から活動を開始した。学級委員(各クラス男女1名)は、実施委員を兼ね、それ以外に募集によって集まった4名の生徒が加わった。2年時中に、オリジナルガイドブックの作成・印刷・製本、3年時になってからは、しおりの原稿依頼・編集・印刷・製本を行った。また、学級委員を中心に2年時中に生徒目標・決まりの原案作成を行い、学級会での意見交換を行うなど、修学旅行に向けての学級会活動の中心的存在として活動した。

VI. お茶と触れ合う体験①〈お茶の歴史を知る〉建仁寺での座禅体験 2日目(9:00～10:00) 実施



修学旅行2日目の朝、宿舎(NISHIYAMA RYOKAN 京都市中京区御幸町)から鴨川沿いを歩き、建仁寺に移動(約30分)。建仁寺は、日本の茶祖とも呼ばれている栄西禅師によって開かれた禅寺として有名である。さらに栄西禅師は中国から茶種を持ち帰って日本において栽培を奨励し、喫茶の法を普及された事が知られている。特に、それまでにあつたごく一部の上流階級だけに限られていた茶を広く一般社会にまで普及されたということを考えれば、現在の我々の生活の中にある狭山茶と関係があることも考えられる。そのような歴史のあるお寺での座禅体験をすることにより、自分たちの地域に伝わる狭山茶との関係を学ぶと同時に、狭山茶を違った角度から見直すよい機会となった。

朝一番ということもあり、観光客や修学旅行生も少なく、境内の静けさの中で座禅を組むことができた。その後、法話を聞き、駐車場に待機していたジャンボタクシーに乗って京都市内班別行動に出発した。



〈建仁寺内にある、茶碑と茶園〉

※茶は、今日では日本人の日常生活に欠くことのできない飲料であるばかりではなく、茶道の興隆と共に東洋的精神の宣揚にも役だっています。建仁寺開山・栄西禪師が日本の茶祖として尊敬されるのはそのためです。〈建仁寺ホームページより引用〉

お茶と触れ合う体験② 〈宇治抹茶を味わう〉 2日目班別タクシー行動中の様子



〈班別行動中にそれぞれの場所・時間・費用で体験〉

2日目班別タクシー行動中に、「宇治抹茶を味わう」時間を班ごとに30分程度設定した。自分たちの立てた行動計画に支障が出ない程度で、お茶との触れ合いの場を設けるというものであった。班によっては、自分たちで事前に調べた場所(ガイドブックやインターネット等を活用)に行ったものもあれば、タクシーの運転手さんのお薦めの場所に連れてってもらい、「宇治抹茶」を味わう機会を満喫することができていたようである。特に、京都の街を知り尽くした運転手さんは、生徒たちが作成した行動計画を予め把握しており、お店の混み具合等を配慮して生徒たちにゆったりとお茶を味わう時間を作り出してくれた。

生徒の感想

- ・暖簾や板張りの廊下、中庭など雰囲気があるお店で頂いた宇治抹茶は大人の味がしました。今までお茶について学んできましたが、こういうお茶の楽しみ方もあるのだと知りました。京都での修学旅行ならではという体験ができて良かったと思います。
- ・宇治抹茶を京都で初めて飲んでみて、予想外に苦くてびっくりしました。飲む前は、結構甘いかと思っていたので、やはり実際に体験してみなければわからないことが知れて良かったです。でも、今回の経験で抹茶が少し好きになったので、家でも工夫して飲んでみたいと思いました。
- ・清水寺の近くで抹茶の粉がかかっているアイスを食べました。お茶の苦みとアイスの甘さが絶妙でとてもおいしかったです。また、知恩院で飲み物を買おうとしたとき、日本のお寺らしい不思議な自動販売機を見つけました。（「知恩院のお茶」と書いてあり、それしか売っていませんでした）狭山茶とは少しちがう味だったけどおいしかったです。



お茶と触れ合う体験③〈狭山茶・静岡茶・宇治茶の比較〉

“色は静岡、香りは宇治よ、味は狭山でとどめさす”（狭山茶摘み歌の一節）

全国にはいくつかのお茶の産地がありますが、その中で狭山茶を産する埼玉県は緑茶生産の経済的北限とも言われている。また、「狭山茶摘み歌」にも歌われているように、埼玉県の狭山茶・静岡県の静岡茶・京都宇治茶については、生徒たちも名前はよく知っているようである。そして、地域がら「狭山茶」こそが日本で一番おいしいお茶であると小さい頃より、よく聞かされてきている。そこで、修学旅行中に三大銘茶を味わい比較することができないかと考えた。具体的には、1日目の朝、または3日目帰着後に自宅で狭山茶を味わい、1日目・3日目の新幹線内で富士山を見ながらお弁当と一緒に静岡茶を飲み、2日目の班別行動で宇治茶の香りを体感しようという企画を立てた。



〈〈自宅で味わう狭山茶〉〉



〈新幹線内での静岡茶〉



〈京都で味わう宇治茶〉

VII. 修学旅行と教科等の関わりについて

今回の修学旅行に関する事前・事後学習の取り組みについては、「総合的な学習の時間」を活用して行われた。しかし、本年度の修学旅行の実施予定日が5月の第3週という早い時期での日程ということもあり、事前学習については、その時間内だけでは十分に確保することは困難であった。そこで、経験豊富な教師の多い本校において、教科の特性を生かした授業の中での学習活動を通して、生徒たちの修学旅行への興味・関心を高める工夫を行った。修学旅行前に授業の中で解説や説明を行った教科もあれば、修学旅行中に生徒の行動の負担にならない程度の課題を出した教科もあった。このような学習を通して、生徒たちの感性も育むことができたのではないかと考える。

教科の特性を生かした学習活動

「事前」 社会 京都・奈良の歴史（お茶との関係が深い豊臣秀吉・千利休等にも触れた
理科 奈良の大仏は合金でできている？(金属資源の活用と絡めて学習)
美術 仏像の見方や楽しみ方(仏像の種類・印相)

「旅行中」国語 修学旅行で俳句に挑戦

(旅行中に、奈良で1句・京都で1句を作成。しおりに記入する)

生徒作品(しおりに記入された生徒の作品の中からお茶に関わるものを抜粋)

・ふるさとの 風の香りは 茶の香り ・風薫る 京都の歴史と 宇治抹茶
・宇治抹茶 心広がる 京景色

美術 旅行中、見学した仏像の様子をよく観察して自分たちで真似た写真を撮る

英語 外国人にインタビュー(日本の印象について聞いてみよう)



〈美術の課題 阿修羅像?〉

〈外国の方々との交流〉

VIII. 修学旅行のまとめ

パワーポイントによる「私の修学旅行記」の作成



〈コンピューター室での作成風景〉

〈仲間の発表を評価〉

生徒たちは、小学校でパワーポイントの基礎を学んできたこともあり、中学校では各自が総合的な学習の時間の中で体験したことをまとめ、パワーポイントを使ったプレゼンテーションによる表現活動にチャレンジしてきた。1年時は、「地域に役立つこと」への取り組みとして、地域の現状（清掃が必要な場所、登下校で危険な場所等を各自で調査）をデジタルカメラで撮影し、その後、清掃活動やポスターの作成等によって、どのように変わったのかをまとめる活動を行った。1年時での発表では、作成に不慣れな面もあり、写真の数も少なく、スライド数3～4枚程度での発表となったが、実際に作成することで、アニメーションを活用したり、仲間との情報交換等によって、プレゼンテーションの様々な表現法やテクニックを学ぶことができていたように思う。2年時には、職場体験学習（3daysチャレンジ体験事業）について各自でまとめ、発表を行った。3日間の活動ということもあり、スライド数は5～7枚と増え、自分の体験した内容をわかりやすく写真（教師が訪問したときに許可を得て職場外観や作業風景を撮影）や表を使って説明することができた。そして、今回が3年間の集大成としての「私の修学旅行記」の作成となった。スライド数は一人6～12枚となり、班ごとに持参したデジタルカメラによって撮影した写真を使用して、各個人の個性を活かした発表資料を作ることができた。さらに、発表形式が事前に分かっていたため、普段は見落としがちな細かい部分（景観条例による看板の色の違いや橋の欄干等）も記録し、発表していた生徒も見られた。

発表時間は一人3分程度（1クラス32名 2時間での発表）という設定ではあったが、各自のパソコンからの一斉送信での発表が可能であり、従来の発表前後の準備や動きの時間（発表者が前に出てくる時間や電子機器を設定する時間等）を大幅に短縮することができた。また、一人一つのモニターで発表を見ることが可能であり、座席の前後に関わらず、修学旅行中の仲間の細かい顔の表情まではっきりと確認することができた。発表

後は、発表内容、画面の見やすさ、パワーポイントの工夫などを5段階評価し、各クラスの代表者を1名決定した。さらに、各教室には普段は個人新聞等を入れるクリアファイルの中にプレゼンテーション資料が掲示され、後日行われた保護者会等で、多くの方に見ていただくことができた。



〈教室の後ろに掲示されたプレゼンテーション資料の様子〉

IX. 修学旅行発表会 平成24年 7月18日(水)

全校朝会にて各クラスの代表者が発表

本校では、学年ごとに総合的な学習の時間の中で取り組んだこと(学習)について朝会で発表している。1学期は3年生が「修学旅行」2学期は2年生が「職場体験学習」3学期は1年生が「地域の清掃活動」の様子について、学年の代表者が発表を行い、学年ごとの学習への理解を深めている。発表も学年が上がるにつれレベルも上がっており、下級生が次年度体験する内容について知る良いきっかけとなっている。本年度1学期に行われた発表会には、各クラス1名ずつ選出された生徒が発表し、自分たちの体験をもとに、後輩たちへのアドバイスを交えて発表することができた。







〈発表された生徒のプレゼンテーション資料〉

X. 成果と課題

〈成果〉

- ・今回、本校の特徴である「お茶と触れ合う体験」を修学旅行中にも取り入れることで、お茶に対する生徒個々の知識や考えが深められたと同時に「狭山茶」を違った角度から見直す良い機会となった。
- ・1年時、2年時で行ってきた「お茶と触れ合う活動」を今回の修学旅行につなげたことにより、一貫性が生まれ、より深く生徒の感性を育むことができた。
- ・一人一人が、パワーポイントで修学旅行中の様子をまとめ、発表したことで、2日目の「お茶と触れ合う体験」の様子を仲間や教師も詳しく知ることができた。
- ・「お茶と触れ合う体験」を修学旅行2日目の班別行動の中に組み入れたが、生徒の立てた行動や費用に支障がでない形で実施することができた。
- ・限られた地域でのお茶の文化ではなく、日本全国に広がるお茶の文化についても、興味・関心を持つことができるようになった。

〈課題〉

- ・今回は「お茶と触れ合う体験」を行ったが、それ以外の修学旅行中に実施可能な体験活動についても比較・検討していきたい。
- ・本年度は、事前、事後学習を個人で行うことを基本として指導を行ってきたが、従来の班を中心としての役割分担・まとめ・発表等も生徒の状況によって取り入れていく必要がある。
- ・事前、事後学習を行う時間の確保が難しくなっていく中で、今後も修学旅行と教科等の関わりを充実させていきたい。

X I . 終わりに

今回、自分たちの住む地域で身近な「お茶」という一つのテーマを設定し、それにどのように迫るかを考え、また、取り組みを進めていく中で、修学旅行自体が、より味わい深いものになっていったと考えられる。そして、修学旅行をとおして「見て、聞いて、味わい、触れて、考えた」ことが生徒一人一人にとって「お茶」や「地域」を見直す契機、人生の中での貴重な経験になったと考えたい。本研究テーマである「感性をはぐくむ修学旅行」にどこまで取り組めたかはわからないが、今後も本校の生徒たちの生活の中で引き継がれる身近な「お茶の文化」が、500km以上離れた京都の地とも深い関係で結ばれていることの一部を知っただけでも、生徒たちの感性に変化があらわれてくるのではと期待して、子どもたちを見守っていききたいと思う。